

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	おふくろの世界 : 「おうち」「におい」作文に見る時間と空間
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	児童の言語生態研究 , 15 : 19 - 37
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045173">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045173</a>
Right	
Relation	





# おふくろの世界

「おうち」「におい」「作文に見る時間と空間」

宮田雅智

## 1 「うち」と「そと」の意識

古来より日本人は「うち」と「そと」というような境界領域に対して敏感であった。それは意識の上では今だ夢の世界（イメージの世界）に生きている子ども達においてはなおさらであり、子どもの存在そのものに関わる問題である。

そこで我々は、子ども達が生きていくということは「イメージ運動」そのものによるものであるとの立場から研究を進めてきた。その結果、子ども達はたとえ現実の世界でどの様に対処してよいのかがわからない場合でも、イメージ運動を連続させていくことによって困難を乗り越えて「外の世界」に向かって生きていけることが分かって

きたのである。

この過程の中から、「外の世界」に向かう子ども達がその起点（もと）となる場所である「うち」をどのように意識しているのかを改めて探る必要がでてきた。

その意識とはつまり子どもという生命体が「帰り」「休む」場所（うち）の時間・空間・人間（じんかん）意識のことである。

それは「意識のベース」つまりその子その子を住まわせている世界そのものを探ることである。それによって、その子その子を根源から揺り動かし、生きる方向性や生きる力を与えている最も根源的なものが次第に明らかにな

っていくと考えた。

また、今日の教育界、さらには社会全体にとって大きな問題となっている「いじめ」や「学校・社会に対する不適應」などについても、こうした人間の無意識の世界から問い直していかなければ、根本的な解決などありえない。それは、これらの多くが「うち」の喪

失によって「そと」へ向けての生命活動が正常に行われなくなった事の表れそのものだからである。

「うち」が本来の姿を取り戻した時、子ども達は「人間のたくましさ」を回復し、伸び伸びと人生を歩んで行くであろうと考える。

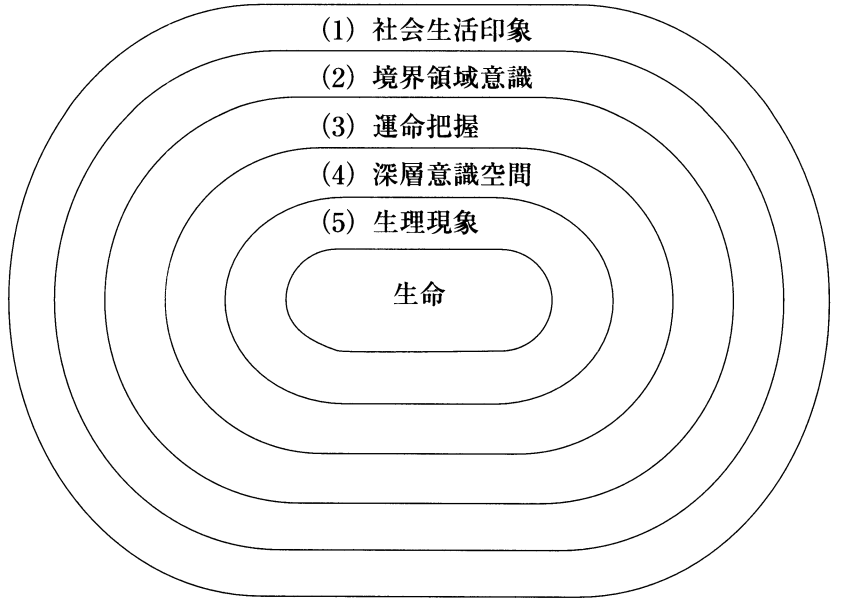
## 2 子ども達の『おうち意識』

先ず我々は子ども達に「おうち」という題名の作文を書かせ、自由に思い浮かんだことを記述してもらった。そしてその中から「子ども」という生命体を包み込んで「おうち」の意識を探り分類していった。（注一部「るすばん」作文からも引用）

それを図式化したものが左図である。

以下それぞれの項目について外側から内側に向かって順に述べていきたい。それによって、子ども達が自分の生命を休め、次への力を得る場である「うち」の中で、どの様な「イメージ世界」の時間の流れと空間に包まれて生きているのかを明確にしていきたい。

## 子ども達の『おうち』意識 (児童の言語生態研究会作成)



### おうち意識 項目一覧表

- |            |  |
|------------|--|
| (1) 社会生活印象 | 『うちんち』 『願望・不満』 『引越し』 『門限』<br>『生活設計』 『家の分割・分譲』 『るすばん』                   |
| (2) 境界領域意識 | 『家の構図』 『扉』 『内と外』   |
| (3) 運命把握   | 『庇護』 『おうちがないと生きられない』 『家の守り』<br>『家の支配力』 『家と人の運命関係』 『家の推移・歴史』<br>『家の神秘力』 |
| (4) 深層意識空間 | 『意識の空間』 『深層意識空間』 『帰ってから・いつも』<br>『意識の残像』 『思い出す』                         |
| (5) 生理現象   | 『愛着』 『ありのままの姿・排泄』 『うちまみれ』<br>『家と母』 『快適』 『落ち着き』                         |

## 『うちんち』

—家の再意識化—

## 1 社会生活印象

\* きのううちんちでともだちとあそびました。  
(西永山小 1年男子)

主に低学年では『うちんち』という言い方がしばしばみられる。これは

\* うちんちはすごくすごくきれいで、それとちがつて前のおうちはきたないです。うちんちにはどろぼうが入ったことがあります。  
(六郷小 3年男子)

「うち」という言葉が自分にとつての家だけを指すのではない事に気がついた子ども達が、数ある他の家と「自分の家」とを区別するための言い方であると考えられる。「自分の家」という空間の限定である。それと同時に、自分の家とその独自性を持つ事の確認が無意識ながらも行われている。

\* お・し・ろーいやー、おしろのお

(六郷小 3年女子)

家の独自性の意識は、自分なりの理想を描く事へとつながっていく。「自分の家」という空間をどのように定めていきたいと考えているのかがここには表れている。

## 『願望・不満』

—うちに求める事—

### ★ 夢(メルヘン)の世界

\* おうち、わたしのおうち。かわいいクッション、外は木でできている。家のまわりも木木木でいっぱい。お花ばたけ。その上で一人お花をつむ。みつばちはあまいみつをくれる。あまいみつ。

おうち、わたしのおうちは、ゆうやけになるとオレンジ色になる。夜、私の家は青にそまる。二階で星を見る。みつめるととうとうとしてねてしまう。

朝、私の家は水色になる。湖で水をくんでくる。帰ってみずをコップに・・・パンを焼いて・・・外にテーブル。木のテーブルなんだ。いすも木。きこりのおじさんに作ってもらった。湖のほとりで食べる。パクパクモグモグおいしいな。するとリスさんの親子もきた。わけてあげてみんなで食べた。

うちに一回ぐらいすみたいなー。お  
かしのうちおいしくて食べきれな  
い。(上石崎分校 3年女子)

\* 今のうちより、ちょう高級なうち  
に住みたい。それと、ごせんぞ様の  
残したうちがありやーな。そこ  
で、お茶を飲む。ごせんぞ様になっ  
た気分になりたい。

(石崎小 3年男子)

現実の世界とはかけはなれたような  
記述が多いが、それがかえって「内と  
外」の明確な区別の意識を表している。

★ 現実的な願い

\* おうちをせめて、あそぶとおか  
あさんが「そとであそびなさい。」  
といいます。もつとおおきなえに  
すみたいとおもいます。

(六郷小 1年女子)

\* ぼくのうちはぼつとんべんじよ。  
しよんべんしてると、ちようくさい。  
トイレに入るたびに水洗トイレにな  
らないかと考えてる。考えても考え  
ても水洗トイレにはならないからほ  
くは悲しい。(石崎小 4年男子)

これらは後述する「快適」さと密接  
なつながりがある。

お金持ちになっておやしきに住みた  
い、という内容の作文が全体的に多か

ったが、次のような作文もみられた。

\* おとうさんがしごとでりよこうに  
いきます。おみやげを買ってきてく  
れました。きようもりよこうにい  
きました。きようはあそびです。たの  
しんできてほしいなと思います。う  
ちはちよつとピンボーなのでもつと  
お金があつて、ひろいうちにすみた  
いなあと思つています。でも、うち  
はピンボーでもじゆうぶんしあわせ  
なかぞくだと思つています。

(上石崎分校 2年女子)

「家」という空間によつて自分の心  
の整え方に影響が出ることを書いてい  
る作文もある。

★ 「家」と心の状態

\* 大きくてしんびんできれいなおう  
ちに一どでもいいからすんでみたい  
です。きれいなおはながいっぱいさ  
いてそこにねたらきもちがいいとお  
もいます。そしたらがっこうにもは  
りきつていけるのに。

(六郷小 1年女子)

\* 大きくてきれいなおうちにいると  
ワクワクする。時間がたつのもわず  
れてしまう。一人ですばんしてい  
たつて平気。せまいおうちにいると  
心がせまくなる。そんなおうちはき  
らい。(六郷小 3年男子)

さらに自分にとって快適な場を求め  
る気持ちが高まると「自分だけの空間」  
が欲しくなってくる。

★ 「自分の部屋」

\* けんかして最後の手段で逃げても  
つかまるけど、へやがあると、へや  
へにげてかぎをしめてしまふ。こう  
いう風に大きい家がいいなと思ひな  
がらアパート生活を続けている

(八王子第六小 4年男子)

\* 今の家は気に入っていますが自分  
の部屋がありません。弟といっしょ  
です。おもしろいから、自分の  
部屋がほしい。(六郷小 6年女子)

「ひっ越す」

——生活空間の変化——

生活空間である「家」が変わること  
は、子どもにとって大きな問題である。  
ただ、今までの生活への愛着度や、新  
しい生活への期待度によつて、イメー  
ジの伸びる方向は正反対となる。

★ 「思い出にこだわる」タイプ

\* おうちと言われたら私はこうい  
ことを思い出します。それはひっこ  
す前のうちのすべり台のことです。  
なんでかというそれはわたしが大  
事にして、ひっ越す時にこわして  
しまったからです。

(八王子第六小 4年女子)

\* おうちにはたくさん思いがあつ  
まっています。私は、一年生の時に  
東京でひっこしをした時に、一年生  
ながらにすこくさびしかつたのを覚  
えています。(六郷小 6年女子)

\* 私はここにひっ越して来るのはう  
れしかつたけど、むこうの家をはな  
れるのは悲しかつた。この家に来  
てからも向こうの家がこいしくて泣  
いていた。やつぱり住みなれた家が  
一番よいのだと思う。今の家は父が  
汗水たらして買つてくれた家だから  
大切にしたいと思う。

(六郷小 6年女子)

ひっ越しの場合、単に生活する場と  
しての「空間性」の問題だけではなく、  
思い出など「時間性」の問題も大きく  
関係してくる。

子どもが安定した気持ちで生活を送  
るには子どものイメージの世界での時  
間の流れが安定する必要がある。過去  
への愛着が強く、これからの生活に思  
いが広がらない時、イメージの世界で  
の時間は切れたままになってしまい、  
新生活に慣れていくだけの力を失つて  
しまう。逆に、これからの生活への思  
いが何かのきっかけで広がっていけば  
それほど悩まずに新生活をスタートで  
きるのである。

## ★『新生活に期待する』タイプ

\* 初めてひっこしをして入った時、おふろば、せんめんじよ、トイレ、台所、たたみべや、子どもべや、みんなピカピカだ。だからひっこししてきたばかりは心がウキウキする。  
(六郷小 3年女子)

\* 私は東京から藤代町へひっこしてきました。家はボロいけど、一軒家なのでよろこびました。前はビルに住んでいたので、庭もベランダもありませんでした。何よりもうれしかったのは、二階だてだったことです。  
(六郷小 6年女子)

「イメージの時間性と心の安定」の問題はひっこしの場合ばかりではない。「日常生活での時間の流れ」そのもの、ある種の決まりが必要になってくる。

## 【門限】 ——「うちの時間」の保証——

「外」の世界と「うち」の世界では、時間の流れが変わる。「門限」が守られないことは、うちの世界ですぐす家族みんなの時間の流れを乱すことになる。

\* わたしのおうちでは、五時三十分には友達とさようならをします。そのあとすぐ六時には夕ごはんになります。七時ごろからおふろです。  
(六郷小 3年女子)

\* お父さんはおそくならないでちゃんと早く帰ってきます。全員でいっしょにごはんを食べます。お母さんが台所の片付けをしている間、お父さんは私達といっしょに遊んだりおふろに入ったりします。  
(八王子第六小 4年女子)

## 【生活設計】 ——生活の流れ——

\* 五時三十分ごろから私は勉強をはじめます。お姉ちゃんやお兄ちゃんもうちよつと早く勉強をします。それから七時三十分にはごはんを食べます。九時ぐらからおふろに入ります。  
(名瀬小 4年女子)

同じ時間同じ事が繰り返されていることへの意識がここには表れている。だからこそ安定した気持ちですぐす事ができるのである。

## 【家の分割・分譲】 ——「譲り」といこの気付き——

「家」に流れる時間は「今」のながれだけではない。「過去」からの時間の流れも大きな意味を持つ。子どもは「建物」「家具」が祖父母から譲られたという話しなどから、そのことに気がついていく。

\* ずっと前におばあちゃんが私の家

にいたそうです。おばあちゃん、おじいちゃんは私の家をひっこして東京に行きました。おばあちゃん達がおいていったダンスと洋服かけをおいていったままでお父さんお母さんで使っています。  
(名瀬小 4年女子)

## 【No.12】 ——ひとりでの世界設定——

子どものイメージ研究を進める上で、我々が当初から注目していたのが「るすばん」における子どものイメージ運動である。(『子ども文化の原像 文化人類学的視点から』編者 岩田慶治 一九八五年 日本放送出版協会 に掲載)

「家」という空間も「るすばん」という時間も、自分の意思とは関係なく伸びていってしまうイメージ運動によって、ひとつの世界として設定される。そうして出来上がったイメージ世界に従って子どもは怯えたりはしゃいだりしながら時をすごすのである。

\* るすばんの時はできるだけおトイレはがまんしている。だつて知らないうちにどろぼうやゆうれいがしのびこんで、ころされたりしたらいやだもん。どうしてもがまんが出来ない時はろうかにでる。りょうがわにへやがあつて、そこを通るのがこわい。りょうがわのへやからお化けやキョンシーがでてくるかもしれないから。ろうかにでるとでんきをつけ

る。こわいからでんきをつけたらすぐにおへやにもどる。そして、でんきがちゃんといいたらまたろうかに行つて、つきはかいだんのでんきをつける。さいごにトイレのでんきをつけてはいります。はいつてからだつて、まずまわりがゆうれいがかくれているいか、ほねがおいてあつたりしていないか見ます。もどる時もろうかをドタバタ走つてもどります。  
(六郷小 3年女子)

\* 一人でするすばんをしている時はラッキーと思う。一人だとすきなことが出来る。るすばんはとーつても楽しい。一人で遊ぶごっこがある。それは遠足ごっこ。リュックにおかしをつめこんで家の中で遠足をする。それが楽しいのだ。

(石崎小 3年女子)  
これらのことについては、さらに章を改めて述べていきたい。

## 2 境界領域意識

「うち」と「そと」の区別に強くひかれていた作文をあげてみる。

## 【家の構図】 ——生活の舞台——

\* わたしのおうちは、にかいだて。うちは四つあります。一つはふつう

のおうちで、もう一つはくらで、もう一つは牛小屋だった物置で、もう一つは自転車やバイクなどいろいろな物置です。わたしのうちのトイレとおふろは、お外にあります。

(上石崎分校 3年女子)

間取りへの意識がここにもみられる。さらに「間取り」と「人間」との関係に目をむけている作文もみられた。

\* ぼくの家はおふろ、台所、テレビのへやに、おばあちゃん・おじいちゃんのへや。ぼくたちのへやと、ちらばってるので、くつつけた方がいいのにといつも思います。

(上石崎分校 3年男子)

## 「扉」

### ——別世界への入り口——

\* ほかに頭の中に思いつくのは「げんかんを思いつく。どこの家にもげんかんはあるそのげんかんをあけて、またドアがあったりへやがあったり、階段があったり想像できる。

(八王子第六小 4年女子)

いうまでもなく扉は「出口」でもあるが、子どもにとってそれは「入り口」である印象が強い。扉を開いて進むたびに違う世界に踏み込んでいくという意識がみられる。

## 「FUTU」と「FUYU」

### ——このよみ別つづるか——

#### ★ 外観による区別

\* おうちはどこからどこまでが人の家とわかるのは「さく」とか「かべ」で分かると思っている。

(玉川学園 4年男子)

\* わたしがおうちとって思いつくのは、たとえば、よそのおうちになんかあったりとなりのおうちと分かれているのはへいで、そのへいの中は私のおうちと思ったりします。

(八王子第六小 4年 女子)

#### ★ 住人による区別

\* ぼくたちは自然にうちとよそを分けて使っているけれども、よく考えると、うちというのには自分に関係のある所や人の時に使っていて、よそというのには自分に関係のない所や人の時に使っていると思います。

(玉川学園 4年男子)

#### ★ 時間の流れによる区別

\* 朝、起きて学校に行く。学校はズバリ勉強をする所。だから家ではゆっくりしてもいいんじゃないかな。家と学校では、家の方がリズムがゆっくりしていると思う。学校では決まった時間通りに動かなければならない。帰れる家があるってことは幸

せなんだな。(六郷小 6年女子)

#### ★ 自由度による区別

\* うちではいろいろなことができる。宿題ゲーム、サッカーなどいろいろなことができる。うちの中では、遊び、おふろやトイレなどできる。うちと学校では、うちの方がいい。

(石崎小 3年男子)

\* よそのうちでは自分が好きなようにできないので自分のうちとはちがうと思います。(玉川学園 4年女子)

#### ★ イメージによる区別

子どもにとって「うち」と「そこ」を区別する最も実感を伴う区別がこれである。「るすばん」の状況ではこれがはっきりと表れてくる。

\* 夜のるすばんでは、カーテンをしめ、かぎをかけるが安心できない。ふとんをかぶってる。おなかがへつたとき、ふとんにかくれながらおかしを食べたりする。そうすると楽しくてたまらない。(石崎小 3年男子)

この子どもにとって「うち」と「そこ」の境界は玄関でもカーテンのある窓でもなく自分に密着している「ふとん」であり、その中にいればこそ楽しむことが出ている。ふとんの外は、この子にとってまさに「そこ」の世界なのである。

このことが本論のテーマである『おふくろの世界』と深く関わっている。

## 3 実命把握

人が自分の家に対して「確かにここが自分の家である。」と実感する時、自分と家とが「共に生きていく」という感覚をもつ。それを「実命把握」としてまとめた。

## 「庇護」

### ——みんなを守ってくれるもの——

\* おうちの中は広い。あたたかいしりっぱで雨の日もおうちが安全にしてくれる。おうちにはたよりになると思う。風の日も安全におうちがまもってくれる。かぜもひかずにいられる。(六郷小 3年女子)

\* 一番安心出来るのは自分の家だ。ミニバスの練習で帰りが遅くなった時も家に入ると安心できる。(六郷小 6年女子)

これ以外にも「うちはじょうぶです。」という記述も目に付いた。しっかりと物に囲まれていく安心感である。これがさらに強い気持ちになると、次の様になる。

## 「おうちがないと」

### 生きられない」

\* おうち、それは人のすまい。人はそこに住んでいる。もしもおうちがこの世になかったら世界の歴史がどうなっていたかなんてわからない。たぶん、ぼくが生まれる前にぜんめつしちゃっていたかも。やっぱり、おうちがなきゃやっていけないよー。

(六郷小 3年男子)

中学年くらいまでは「生活の場を失う」不安から書いている子どもが多いが、高学年となると内面的な理由を挙げてくる子どもが増えてくる。

\* 家とは心がほっとするところです。つかれている時や悲しい事があった時、家に帰るとなぜかほっとします。私は実際にそう思います。学校や外であった出来事を家では全部しゃべることが出来ます。しゃべると、体にたまっていたストレスみたいなのがふきとんで心が軽くなります。つらいことや悲しいことをみんな半分に分けるというのが家だと私は思います。家は私にとってではなくてはならないものです。家がなくなったら、私はきつと生きていけないようになります。それほど家とは大切なものなのです。(石崎小 6年女子)

## 「家の守り」

——大切にしたい気持ち——

それほど大切にしたい気持ちがある

ばこそ「うちの世界」を乱すもの・壊すものへの拒否反応も当然ある。

\* いつも友達が来ると帰る時にかたささない。いろんなことをするのでうちの中がとてみたくなくなります。(六郷小 3年女子)

\* 家でこわい時は、二階にいる時にじしんが来たときです。家の柱にひびが入っていたので、くずれるんじゃないかと思うとこわいです。(上石崎分校 3年男子)

\* うちがふるばから白アリとか黒アリとかががじっちゃって、まる子の家みたいです。たたみが変わったので一回茶の間のたたみをほりかえしました。うちのネコがへやのすみっこでおしっこしたにおいが残っているからやだ。(上石崎分校 3年女子)

## 「家の支配力」

——勝手に出来ない時——

しかし時に家は自分を規制することもある。

\* ぼくはおうちの中でへんなことをするとおかあさんがジロツと見てすぐおこるからいやなんだ。おとうさん、おかあさんもやだ。だからきらい。大きらいなんだ。(東侯野小 2年男子)

\* せんぼうきのとりのあいで、おにいちゃんがいじわるで自分だけのことしかまわさせない。ぼくはうちのいちちゃんがせいこいと思った。家はあんまりすきじゃない。(八王子第六小 4年男子)

\* うちにいると、いつも勉強しろと言われてうるさい。あとぼくが遊びの話をしているといつも、勉強はどうなってるの、と言われる。(六郷小 6年男子)

親、兄弟だけではなく、仏壇わきの写真から「先祖」の支配力を感じている子どももみられた。

\* せんぞさまは、自分の体がないからしゃんにとりついて、かぞくをまもっている。角度を変えて見てもせんぞさまは、こつちを見ている。てれてしまうな。こわい顔だとにげるしかない。(石崎小 3年男子)

## 「家と人の運命関係」

——家による運命の規定——

家をただの「すみか」「休む場所」としてだけではなく、人の生活や運命を決定づけるものとして捉えている作人もみられた。

\* 三才ごろ、ぼくと泉君はおむかえどうしだった。だけど何か月かする

と泉君はひっこしてぼくもひっこしてしまった。家は新しくなったが泉君とは別れてしまった。(六郷小 3年男子)

\* うちの二階の部屋は、お母さんがよめにきた時の思い出の部屋。お母さんのために高いお金を出してくれた部屋。(石崎小 3年女子)

\* 家にはいろいろある。例えば一戸建てやアパート、マンション。アパートやマンションは、大きなたてもの、いろいろな家族がいつしよにすんでいる。だから一戸建ての人とは違う。家としては同じでもくらしが違う。(石崎小 6年女子)

\* 私が生まれる前に、流産した子がいて、その子が生まれていたら、私は生まれていなかったそうです。(六郷小 6年女子)

\* うちんちはいやだ。庭があるのはいいけど、光風台みたいな団地がよかったな。一緒の方向に帰る人も少ない。光風台の人達は、いつもたばになって楽しそうに帰っている。それがうらやましい。これは家の場所のせいだ。友達と遊びたくても、ほとんどの人が光風台。離れているので、自転車で行くがすぐくつかれる。これも家の場所のせいだ。みんな早

く中学校に行きたがっているが、私はその反対である。行きたがっているのは、光風台や東観なんかの団地の人達だ。私は線路から反対側に住んでいるのでみんなと違って藤中だ。藤中に行く人はうちのクラスでは男女六人だ。あとの三十九人は南中である。五年生の時は、いやな奴とかがほとんど南中に行っちゃうからラッキーと思っていたけど、今はそんなに嫌じゃなくなつた。みんなと別れるのは嫌だ。みんな家の場所が悪いのだ！家なんて大キライ！

(六郷小 6年女子)

\* 私は家族が大好きです。私はこの家族の一員で良かったと思つています。これからも楽しい家族でいることでしょう。でも私達きょうだいが大きくなるたびに、家族の家族の一人一人が色々な所に散らばっていく。そして最後には家族が崩れてしまうんだろうな、と思うと不安です。

(六郷小 6年女子)

## 「家の推移・歴史」

### ——家の始まりやこれから——

\* うちの家は十年前も前にたつたようです。わたしは、もちろん七さいなのでしりません。でもうちのかぞくは、わたしをぬかしてみんなしっています。

(六郷小 2年女子)

このことがだんだんと「古いからすごい」「愛着がある」という思いへとなっていく。

\* うちの2DKの家だからとつてもせまいけど、ぼくが生まれる前からあり、すんではないけれど、おじいさんがその家を使っていました。

(八王子第六小 4年男子)

\* おばあちゃんの家は、とても古いそうです。家の庭からみると、時々穴があいています。家の中からみてみると、今にもたおれそうな気がします。おばあちゃんの家は、おじいちゃんとおばあちゃんがけっこうしたときたてたそうです。だからとても古いので時々たてなおせばいいのと思ひます。でも、おばあちゃんはその家をすごく大事にしています。おばあちゃんの家はとても思ひでの家なんだと思ひました。

(六郷小 4年男子)

\* ぼくのうちは、ぼくが生まれたころに一回たてなおしました。今すんでいるよこに、すこしのこつています。かべは全部、土ねんどみたくてきつたりすると土がポロポロとおちてきます。そこは今、そうこです。でもぼくはどつちかという古い方が好きです。古いのはとても心をこ

めて使つたからです。よくこわれないでこんなに長い日、ここまであつてすごいと思う。信じられませんが。

(六郷小 4年男子)

\* やがて、その家もこわされてなくなり、新しい家がたつのである。その家族もなくなり、やがては一三代一四代目となるのだ。

(玉川学園 4年女子)

## 「家の神秘力」

### ——我が家ならではの神秘性——

イメージの世界に素直に誘引されながら生活している子どもほど「家の中にあるもの」や「家の中の特定の場所」に対して神秘性を感じてしまう。それがある意味で「これが我が家」という実感に結び付いている。

\* るすばんの時はふしぎな物音がコトコトつとなつた時があつた。だからふしぎなおうちだなあと思つた。

(六郷小 3年男子)

\* お兄ちゃんのへやは、死んだ人のしゃしん、つまりおじいちゃんのお母さんとおじいちゃんのしゃしんがあつて、こつちをみてるようでこわい。うちのかべにおねえちゃんが小さいころにかいてしまつたらうかがいがあつて、いまでもなんとなくのこつている。わたしはかべがかわいそう

かべがおこつて夜におねえちゃんをおそいそう。

(石崎小3年女子)

\* 茶の間のとなりは客部屋で変な青い目の人形があつて、それを見るとゾクゾクしてきて夜まつくらになると目が光つて、だからそこにはあんまり行きません。

(石崎小 3年女子)

\* 一つだけわたしにとつてこわいところがある。それは、かがみ。お母さんがおけしようするところのかがみが、ものすごくこわい。だからその時ファミコンをしようとしても、そのへやにかがみがあるからこわくてやれない。

(六郷小 3年女子)

## 4層意識空間

「家」はただ塀や壁に囲まれた空間ではない。そこは特殊な意識の動く空間である。それは、我々のいう「先験的イメージ」の動き出す空間であり、外界とは違つた時間の流れをもつ世界である。

## 「意識空間」

### ——まわりと違つた世界——

\* 家に帰ると、毎日毎日ろうかが四つに見える。かいだんをおりる時、目がみえなくなつてかいだんをふみ



はずし、さいごにけがをする。

(六郷小 3年女子)

\* 昼間、見たい所がある。それは天じょうの上である。そこに、かくし小ばんとか、お金がありそうな気がする。本当にみてみたい。すごいものがかくされていそうで、とれたらよだれが出てしまうかもしれない。

(石崎小 3年男子)

本当に階段が四つに見えるのか、天井裏に何かがあるのかは問題ではない。「家の中」のある空間が、そうしたイメージを呼び起こす力を持っていることを問題にしたいのである。

## 『深層意識空間』

### ——「家」と「穴」——

「穴」あるいは「つぼ」と「家」のイメージはどこかで重なりをもつ。

\* 遊びから帰って来てドアを開けたとたんげんかんの前に大きな穴が空いててのぞくと「うわーたすけてー！」そしてどうくつにつきました。進んでいくと、そこにいどがあつて、その中を見るとポッチャーン、そこは海の中でもそこにもあながありました。入ってみるとさいしょのどうくつがありましたそして気がつくと家。おかしいな。さっきまでどうくつにいたのに…。(六郷小 3年女子)

\* 一つのへやに、ひとつのつぼがある。それは夜になるとおそろしくなり、そうじきみたいになって、みんなのことをすいこんで、さいごにははれつして元にもどる。あと、水道の水が出しっ放しでそれが沼になって、その沼に鏡ができて、近付いたら自分は自分でも、ほんたいにうつるのが、うつってなくておどろいた。

(石崎小 3年男子)

ここで「つぼ」はみんなを吸い込み包みこむものとして扱われている。「沼」や「鏡」も「のみこむ」「うつし」とる「感覚を持つ」。

\* おうちの中はめいろだらけ。トイレやおふろや台所や、いろいろな所につながっている。めいろをたどっている人が、今、宇宙にいった。

(石崎小 4年男子)

穴をぬけると別の世界が広がる、というこのイメージ世界の構造がポイントである。

我々は「穴」作文の分析から、ひとつの仮説をもっている。一部を引用してみる。

『穴と「母胎」のイメージ——穴には「実体」はないが、その中に「うぐめく」ものは、人間の根源的な生命である。その生命力に帰ろうとする情動が穴のイメージを誘導しているのであ

るが、その生命を宿すものは母胎である。従って、子どもたちの潜在意識の中に、その母胎のイメージや母胎から出てくるイメージの記憶が残っている

もいいのではないかと考える。(中略)まず、穴のイメージが、なぜ、縦穴↓横穴↓トンネルとなっていくか、ということがある。縦穴とは袋状、つまり母胎或いは子宮である。次にその袋から出ようとして出口のあるもの(横穴)となり、次にトンネルへ、つまり産道へ入っていく。このような胎児から産に至る人間の記憶の順序が、この穴のイメージになっているのではないか、ということになる。』(子ども文化の原像 前出書 P一四〇)

この仮説からすれば、「家」のイメージと「穴」のイメージが重なるのはごく自然なことである。「つぼ」に吸い込まれるイメージも「再び穴(袋状に包んでくれるもの)に帰る」という潜在意識の表れとも言えるのではないだろうか。

## 『帰ってから・うぐせ』

### ——いつも変わらない時間の流れ——

次に「家」における時間の流れについて考えてみたい。『うち』と『そと』の項に挙げた文例では、家のリズムがゆっくりしていることを感じとっている。この感覚は、『生活設計』の項で述べた「同じ時間に同じ事が繰り返されている」ことからきていると考えられる。

\* いつもおうちにかえたら、やることをおもいだす。(西永山小 1年女子)

\* 学校から帰ってつくえにいつもかばんをおいて時間わりをしています。(名瀬小 4年女子)

\* ぼくの家ではみんなで食事をしたりテレビを観たりしています。その時間帯は必ずいつもの決まった場所に集まります。その時が一番楽しい時です。(石崎小 6年男子)

子どもに限らず人間は「そと」の世界で次々と起こる多様な出来事・問題に対応しながら生きている。

それ故に、「帰り」「休む」場所である家は「いつも決まった事」が「変わらずに繰り返される」場所である必要がある。現実への対応に疲れた心と体を休める場所が、さらなる対応を迫る場所であったなら人間は生きる拠り所を失ってしまう。

『帰ってから』ということでもう一つ重視したのが「イメージの時間・空間の切り替わり」ということである。われわれはこれをトランスフォーメーション(転換)と呼んでいる。「そと」から「うち」に帰ってきた時に、イメージの世界が「そとへの現実対応」へと動いたままであったなら、形の上で帰宅しても「家」に戻って来たことに

はならない。

子どもがトランスフォーメーションを容易に起こす上で大きな意味を持つのが「ただいま」「おかえりなさい」というやりとりである。

\* おうちでは、妹とお母さんが、私とお姉ちゃんが学校から帰ってくるのを待っています。わたしが学校から帰ってくると妹はかならず「おかえり、まりちゃん。」と言ってくれます。だからわたしは楽しみに帰ります。  
(六郷小 3年女子)

\* 「ただいま」「おかえりなさい。」学校から帰って来ると、母はいつも答えてくれる。家族ってとてもいいものだと思う。ケンカをしても、すぐに考え直して、家族に対して素直になるといいな。  
(六郷小 6年女子)

「おかえりなさい」と言って迎えてもらえることで、心から「うち」へ帰って来たと感じることができている。

また、そんな思いをもたせてくれる家族だからこそ、時にはケンカをしても……という気持ちになれるのであろう。

\* 家。気楽に「ただいま。」とか「いってきまーす。」と言って家をでていったり学校から帰ってきたりできる。帰ってきてみたら家がなかった。

た、なんてことは考えたこともないし、実際にそうだったこともない。

(六郷小 5年女子)

今、この作文の「気楽に……でいったり」という言葉に注目したい。「帰ってくる家がそのままの形である」ということが前提にあるから「そと」に出かけられる、ということは重要である。出かけている間の不安が書かれている作文をいくつかあげてみる。

\* 学校から帰る時、カラスなどが鳴いていると、フツと家がないんじゃないかと思うけどちゃんとある。家のなかで何かあったんじゃないかと思うけど、どこにもかわったことはない。  
(石崎小 3年男子)

\* 学校からうちに帰る時、うちの近くになった時は、かならずうちの方を見る。それは「うちちゃんとなるかな？」と思うからだ。  
(石崎小 3年男子)

\* 私は、学校やおでかけから帰って来る時、家が火事でもえていたらどうしよう、飛行機がついらくして家がぶっこわれていたらどうしよう、とか思う。それに、家にどろぼうとかいて、帰ったらお母さんや妹が殺されて、私も家の中に入ったら殺されるような事を思いうかべる。

(石崎小 3年女子)

「我が家」と実感できる場所に「帰ることが出来る」約束の上に、人間の生活は成り立っている。そのことをあの子どもは次の様に書いた。

\* 家とはみんなが帰るところだ。学校や会社、いろいろあるが必ず家には帰る。だからといって、あちこちの家に勝手にあがるわけではない。自分の家はちゃんと決まっている。入る時に「ただいま。」と言って帰ってくる人は血がながっている人だ。家がなかったら家族みんながバラバラになってしまう。一緒に過ごす時さえなくなってしまう。私達は自分の家があつて帰っているわけであり「ただいま。」「いってきまーす。」などが言える、とてもやすらぐ大切な場所である。

(石崎小 6年女子)

## 「意識の残像」

### ——イメージの連続化——

家から離れている間も家は変わらぬ姿である、という意識をベースに持つて外出していた子どもは、帰宅した時に自分のイメージとして残っている「出かけた時の家の様子」と「帰った時の様子」との照らし合わせを意識的にせよ無意識的にせよ行う。

これが一致することで、外出前と外

出後のイメージの世界はつながり、自分の中では連続したものになる。一致しない場合は不安な気持ちがわきあがってしまう。

\* 夏に秋田に行く。何日もとまって帰ってくる。「何にも変わっていないかな？」と毎年思う。うちについた。いつもテレビをみるへやに行く。へんな感じが少しする。  
(石崎小 3年女子)

\* おうちに帰ると別なおいがしてくさいことがある。だから、だれかが入ったのかもしれないと思った。あとでできいたら、るすのとき、おばあちゃんがうちの中にはいつた。  
(石崎小 3年女子)

\* わたしは、おでかけから帰って、まず自分のへやにいつて、ぬいぐるみとかを一つずつ見ていつて「あ、やつぱりおうちだなー。」となぜか思った。それから、かべのポスターに「ただいま！」と言う。  
(石崎小 3年女子)

\* 私が帰ると、自分のへやが朝ちらかした服があつてまくらがベッドから落ちて、つくえの上に時計があつてぬいぐるみがいっぱいおいてある。それから台所へいくとコップやおさがらがおいてあつて、お父さんが

朝読む新聞が台の上においてある。おぜんの上に朝食の残りが時々ある。ベランダにはせんたく物がほしてある。(名瀬小 4年女子)

この「ベランダにはせんたく物がほしてある。」という記述は「出かけた時」とは違っている、子どもにとつては「いつもと変わらぬ母の仕事」の残像なのであろう。

\* 帰ってきてドアを開けたしゅんかん、なつかしいなと思う。そして、自分のへやに行くときやっぱり自分のへやだなと思う。(石崎小 3年女子)

イメージの残像としての家に再び巡り合う事ができたという実感が「なつかしい」という言葉になったのだと考えられる。

### 【思(Shimo)】 ——イメージとの巡り合い——

「そと」が現実対応の世界であり、イメージの世界(夢の世界)を持ち込むわけにはなかなかない分、とりわけ子どもは「うち」の中ではイメージの動きに素直になって生活を送っている。そこは特別に連続した時間の流れを持っている。だからこそ「思い出」として心にしまわれたイメージが容易に時空を飛び越えて蘇ってくるのである。

\* いつもおうちにかえたら、おりがみをやることをおもいだす。あと、えをかくこともおもいだす。(西永山小 1年女子)

この場合も「おりがみ」「え」という遊びを思い出すというよりは、その時に伴った楽しさ等の情動が家という空間によって蘇ってきたと捉えるべきであろう。

\* おうち。おうちは思い出のつまるところ。けりをいれてかべに穴を空けてしまったり、ガラスだつてわつたことがある。こういういろいろなことが家にはつまっている。(石崎小 3年男子)

\* おうちという自分のへやが思い浮かんでくる。二年のころのべんきようも思い出す。なつかしい。(六郷小 3年男子)

\* 家に入ってくるいろいろな事がわきでてくる。例えば、家族の事とか、楽しい事うれしいこと、忘れていた事を思い出してしまうのです。でも悲しい事、困った事があつてもドアを開けると、なぜか忘れてしまふことがある。(名瀬小 4年男子)

この「思い出してしまふ」のも「忘

れてしまふ」のも共に家がもたらしているのである。

## 5 生理現象

最も体感に素直になって感じている事をまとめたのがこの項である。

### 【愛着】

#### ——家の命の実感——

家が単なる「建造物」ではなく、命あるものとして捉えられている作文をあげてみる。

#### ★ 人としての顔

\* 私の家は正面からみると人間の顔に見えます。(八王子第六小 4年女子)

#### ★ 共に生きるパートナー

\* 私が今、住んでいる家は、私と同じ年です。私が生まれた時にたった家です。私はこの家が大好きです。絶対にひっこしたくありません。でも今まで大事にしています。柱にきずをつけてしまったこともありました。(六郷小 6年女子)

#### ★ 甘えられる相手

\* 家、それは自分が一番落ち着ける場所。くつろげる場所。そして家族を守ってくれる場所。家族みんな

生活していく場所。なぜかという、それは十二年間住み続けたからだ。その十二年間には、地震や台風などいろいろなことがありながらも家族みんなを守ってくれたのである。寒い時も暑い時も助けてくれたのである。

家には自分の部屋もある。もつともくつろげてだれにもじゃまされないし、勉強もはかどるし、自分の好きなことができる。くやしい時は家をいじめ、眠い時はとことんねむり、おながすいたられいぞうこを開けて、すっきりしたい時にはおふろに入る。それが私なのである。(石崎小 6年女子)

「家をいじめ」という記述等に、単に庇護してくれる建物以上の愛着を感じる。

### 【ありのままの姿・排世】

#### ——はばかりすにすむ空間——

よそでは人前で平気でおならをしたり、だらしな性格をしないようにつけられている、家の中ではそれほど厳しくはない、という場合は珍しくない。また、家では平気ですいている大便を、学校では抵抗を感じてしないという子どもも少なくない。

生理現象の上でも「家」は特殊な空間といえよう。

\* 家に帰ると安心してうんちができるもんね。それに、ふろに入る時、はだかになってもだいたいじょうぶ。家の人の前ではおならもできるもんね。  
(石崎小 4年女子)

\* おうちの中。おふろに入ったあと家の中でおどつてた。でもお客さんが来たら大変。パンツはいてシャツを着ないと大変だ。(石崎小 4年男子)

お客さんという部外者がいる時、家は「おうち」ではなくなる。

あたりをはばかることなく、生理現象をしたり、気分のままに裸で踊る姿は、赤ん坊や幼児の頃の気分を想起させる。

類似したものとして、例としてはそれ程多くはないが、次のようなものもみられた。

### 「うんちまみれ」

——体を包む生温かさ——

\* わたしのうちは、青やねです。けっこんすると百階だてに住み、やねはお花がいつぱいで下にはうんこを百こおいて山のように積みあげる。それは犬百匹に一匹一こ出させる。出ないやつはうんこ百こを食べさせる。  
(石崎小 3年女子)

\* おうちの中はうんこだらけ。入った人はうんこをふんでしまう。こえ

だめ、ポットンベンじよにおちたらくさくて外に出られない。うんちがふつてくると、うんちのおうちがつぶれる。そしたらふつてきたうんちでまたおうちを作る。  
(石崎小 3年男子)

\* だれかのおうちはうんこだった。とっても大きいうんこのおうちだった。においはとってもくさくて、さわったら本物のうんこだったのです。わたしは水道をさがしました。水道をあけるとうんこができました。全部がうんこでした。植木もうんこでした。うんこの指輪、うんこの洋服でした。  
(石崎小 4年女子)

深層意識空間で述べた母胎のイメージが、「うんち」という生温かいものに囲まれている、というイメージの世界構造を作り上げているのではないだろうか。

### 「家と母」

——おうち世界の象徴——

家族に関する記述の中で最も多かったのが「母親」に関するものである。内容としては予想通り「家事」に関する事が中心であった。

しかし、本論はイメージの時間性・空間性を探ることがねらいであるので、一般的な母親像としての記述は除外していくことにしたい。

\* るすばんでいやな思い出がある。三才の時、ねていて夜中に目がさめたんだ。そして、おかあさんがとりにねていなくなったから「ママ」とよんだ。そしたらへんじがなかった。もういちどよんだ。でもへんじはない。下にいったらまつくらだったから電気をつけた。台所にはいなかったとなりのへやにもいなかった。そのまたとなりのへやにもいなかった。にかいにもどろろとしたが、かいだんのところで泣いていた。もう一回さがすことにした。台所、となりのへや、そのまたとなりのへや、やっぱりいない。また二階で泣いていた。十分ぐらいそこで泣いていた。そしたらお母さんが帰ってきた。何て言ったかはおぼえていない。落ちていたよ。

あの時の気分は「お母さんどこにいったらいいだろう。わたしをおいて、どっかいっちゃったよー。早く帰ってきてー」という気分。それからるすばんが何かこわくなった。  
(石崎小 3年女子)

\* うちに帰ったらお母さんがいなくなった。『ほくだけおいてどこへ行ったのだろう。手紙ぐらいおいていてくれればいいのにな。』と思った。だれもない家の中で自分だけ心の中でいろいろな事を思っていたら時間がどんどんたっている。お母さん

が帰ってきて、今までの事をわすれました。  
(六郷小 3年男子)

この二例は、本来いると思つた母親がいなかったことで『おうち気分』が失われたケースである。先に述べた言葉でいえば、イメージの流れが切れたままになってしまったのである。男子の例でいえば、もしも「母からの置き手紙」があれば、それがトランスフォーメーションを起こす媒介となつたのかもしれない。

ただ、次の例でもわかるように、トランスフォーメーションを起こすための最も強力な媒介が母親なのである。それは、母親自体があらゆる面で『家のイメージの象徴』だからである。

\* るすばんの時、かみなり。こわいのをがまんしていたら、お母さんが帰ってきた。こわいのがきえてしまったようだ。  
(石崎小 3年女子)

\* ほくが病気の時、るすばんをして、といわれて「いいよ。」と喜んでしまった。どんどん熱ができて、おなかも痛くなってきた。ああ、あの時いっちゃだめ、と言えよよかった、と思ひました。泣きたくなってきた。ああ、泣くのはいやだ。こんなことで泣くな。こんちくしよー！むかつくな！お母さんが帰ってきた。ほくは泣いちゃった。

(六郷小 3年男子)

## 「快適」

### ——イメージに浸れる空間——

子どもが家の中で快適だと感じるのはどのような時だろうか。

\* おかあさんが、かいいものといったからよるんだ。やったー、やったぞー！そうだとスーパーファミコンをしよう！  
(石崎小 2年男子)

\* 私はるすばんが好きである。だつてうるさいお母さんから解放されて自由になれる時間だから。おもしろい遊びで飛び跳ねられる時間だから。  
(六郷小 4年女子)

\* まずやるのは、ファミコン。約束では時間は一時間だけど、お母さんもないから時間をやぶれてとても楽しい。あきてしまつたつに入つてねてるんだ。おきるとこたつでかくれんぼをしたり、こたつのたんけんごっこをやる時もある。それが楽しいな。  
(石崎小 4年男子)

\* あー、今日は、ママもパパもいない。さーて、さてさて、わたしのファンタジータイム。ルンルンランラン！そうだ、クッキーを作ろう。  
(石崎小 4年女子)

これらにみられるのは、母親などから受けている規制からの開放感である。

ここでの母親はトランスフォーメーションの媒介ではなく「そと」と同じ現実対応を迫り「うち」気分をなくす部外者である。子どもは「うち」では夢の気分に入りたいのである。

別に子どもを自由に放任せよと言いたいのではない。ただ、子どもの本音を受け止めずに大人の考えを押しつけて子どもは「家」気分の破壊者として反発しかしてくれない。

勿論、家族と共に快適さを楽しんでいる作文もある。家族みんなが「うち」気分を作り上げる構成者なのであろう。

\* お母さんやお父さんといっしょにすんでる所。外とはちがつてゆったりできて、おうちの中ではのんびりできて、すきなことができる。  
(玉川学園 4年男子)

\* 自分の一歩身近にいる人が家の中にはいる。お互いに心がわかりあえる人達が家族というものだから、時にはケンカをしたりふざけあつてできるのが家族。家とは、家族がいて、楽しくて、ふれあいのある所。  
(石崎小 6年女子)

\* 家とは家族がそろいふれあう所だと思えます。楽しい会話が出てくれば、つまらない時でも楽しくなるか

らです。  
(石崎小 6年女子)

\* 私は自分の家が大好きです。うちのお母さんは、つとめていないので、家に帰れば「おかえり。」といつてくれるし、家族全員で食事をしたり、いろいろ楽しい事ができます。それには家では、自由な事ができます。家は最高にいい所です。  
(六郷小 6年女子)

また、家族は始めから関係なく純粹に自分一人の世界に浸っている子どもも見られる。

\* 一人でいる時、ぼくは家をたんけんしている。たまにとうみんごっこをする。そうすると楽しくなる。  
(石崎小 3年男子)

\* わたしはよくひとりひなたぼっこをしています。日が当たって体がぽかぽかして体中がおんせんみたいになつてすごくおもしろいです。  
(石崎小 3年女子)

ここで大切なのは、親がいない間に秘密の事をしている事などではない。また、家で何をしているのかも、それほど重要な問題ではない。

我々が常に問題にしてきたのはイメージ運動である。つまりそれぞれの子ども達を誘引するイメージの動きそのものである。

ものである。

イメージは、時としてイメージを浮かべている本人にさえも分らない世界に自分を引つ張つていつてしまふ。「るすばん」の状況におかれた子どもは、まさにそれである。

そしてこのイメージの伸びる方向には多分に固有の偏りがみられる。我々はこの「イメージの偏向性」に、その子としての個性を見出だそうとしてきた。(児童の言語生態研究第一四号 特集「あの子にこの子——子どもの個性への接近」)

外的な規制がない状態で、この場合は「家という空間」で自然に伸びたイメージの方向こそ「本当の自分」なのである。ナマの自分をさらけだし「これが自分だ」といえるイメージの世界に浸りきれるからこそ、それを快く感じるのである。

## 「落ち着き」

### ——心から休める空間——

家は別名「ねぐら」ともいうように、眠りをとり休む所である。落ち着いて休める場所としての家を探つてみたい。それはつまり、「落ち着いた空間」へトランスフォーメーションを起こすための鍵を探ることである。

★ 「木に包まれている」思い

\* 家とは玄関を思い付く。床がきれいだと思つた。家はあたたか

い。ぬくもりがあるからだ。たまたみにすわると、たたみのおいがする。木造の家だと、なんか落ち着くような感じがする。机なども木できています。  
(石崎小 6年男子)

★ 「小さく包み込まれている」思い  
\* 自分の部屋は三じょうしかありません。さらに机とベッドがあってもせまくかんじます。でも、とても良く休めます。それはベッドがあるからです。(玉川学園 4年女子)

\* 安心する場所はムクムクとあったかーいこたつの中。こたつの中に、頭まで入れあたたかい気分になっっていることをそうぞうしてる。  
(石崎小 4年女子)

\* 小さい頃は、だんボールを集めて、おかしをたつきさん食ってそのままねたことがある。(石崎小 4年男子)

次の例では、昼間は「自分だけの小さな世界」を作ることで「落ち着き」を獲得できるのに、夜はあまりにもイメージ運動が別の方向へ自分を引くのでトランスフォーメーションを起こせないでいる苦悩がはつきりと語られている。

\* ひみつきちに行つて自分の世界を作る。もうふか何かがぶつてすこー

く小さい世界を作る。その方が安心する。

もう一つ、一人の時にイメージを広げる場所がある。それはこたつの中である。

夜は、そうはいかない。同じへやにおねえちゃんもいて、ちがうへやにおじいちゃんやおばあちゃんがいるのがわかっていてもやっぱりこわい。こわくない人がうらやましい。一度、味わつてみたい。そう思うけど、どうも気持ちゆるしてくれない。どんどんこわいイメージが広がる。  
(石崎小 4年男子)

★ 「においに包まれている」思い  
\* いとこの家に行った時になかなかねむれない。ふとんのおいがちかくてねむれない。うちに帰つたら、よくねむれるし、自分のふとんってかじがする。  
(石崎小 3年男子)

\* いとこのうちでねる時は、死んだ人のしゃしんが上にかざつてあつて、ジーツとズーツとみてるような気がして、なんかなれなくておつかなくてねむれない。うちに帰るとストレスがいっきに出てグーグーとねてしまう。やっぱりうちが安心してねむれる。人の家はやだ。においもちがうし、なれてなくて、きんちょうするから。  
(石崎小 3年女子)

★ 「家族みんなに包まれている」思い  
\* 自分は何日かたたないとなれないタイプなのだ。だからおとまり会なんかみんなねたのにわたしだけおきているのだ。一人で起きていると心細くてうちに帰りたくなるんだ。うちはわたしにとつておちつくところなのだ。帰つてくるとホッとする。急に気がぬける。帰つてきてからその日の夜はぐっすりねむれるのだ。

でも、お母さんたちがねてるへやの方がぐっすりねむれる。  
(石崎小 3年女子)

\* おうちから思い出せるのは、お母さんにお父さん、それから妹と弟がいて、私もいることが思い出せる。ペットのハムスターはかわいい。家族がいると楽しい。家に帰るとあつたかく感じる。家にいるとなんとなく落ち着く。  
(名瀬小 4年女子)

単に一緒というのではなく、家族みんなに包まれている(囲まれている)イメージが働いていることが「あつたかく感じる」という記述から想像できる。次の六年生の作文にはその点が具体的に書かれている。

\* 家とは家族みんながいる所だと思ふ。でもそれは、ただ家に住む人ではない。一人一人が協力しあつたり、みんなが楽しまなければ家族ではな

い。家族がふれあう場所である。それになおかつ、家は自分の悩みを改善する場所であると思つた。

家族や家と一緒にいると心や体の疲れをなくしてくれる。悩みをなくしてくれる場所である。

だからもつと家族がふれあう場を増やしていかなければいけないと思ふ。  
(石崎小 6年男子)

\* 家は家族みんなの顔がそろい一日の出来事などを話したりする。落ち着きや安心を持たせるところもあると思ふ。  
(六郷小 6年女子)

★ 「我が家に包まれている」思い  
「そと」での出来事がこのような形で一日の最後に包み込まれればぐっすり眠りにつくことが出来るし、次の日も元気に出かけることは容易に想像がつく。

\* たいいんしておうちに帰つてきて安心した。おうちだとてんきもこない。うちの犬もうれしそうだった。かんごふさんに「おうちに帰つてもしずかにおとなしくしてるんだよ。」といわれた。しかしわたしはあばれてしまった。おうちにはかみさまがのりうつつていてまもつてくれている。それにおうちにはかぞくがいる。だから、あばれて楽しんだ。おかしをもつてきて食べまくつてたのしか

った。びょういんの一週間はとても長かった。びょういんのふとんのおいは何かなれないにおいだった。でもおうちのふとんのおいはわたしのにおいがのりうつったようなにおいだった。(石崎小 3年女子)

\* おうちに大黒柱があるからおうちというのかもしれない。(玉川学園 4年女子)

\* おうちで聞くとか何か熱いお風呂にはいつてる感じ。うちんちのおうちはやっぱり他の家にいるより心が楽になるよねー。おうちでいうと、やっぱりおうちだよねー。(石崎小 4年女子)

\* 家とは家族と住む所、ねむる所、食事をする所、家族で会話をする所である。みんなが別々の事をしていても、家族は大事なまとまりで、家は家族の幸せを運んでいてみんなを安心させてくれる。(石崎小 6年女子)

\* 家とはつかれた体と心を休める所だ。仕事から帰ったお父さんの体を遊びつかれた子どもの体を、難しい勉強をして帰ってきたお姉さんのつかれた頭を休める所なんだ。家はつかれたみんなをやさしくつつんでくれる所なんだ。家とは安心感がある

所だ。学校から帰って来てげんかんに入るとほっとする。旅行に行っていて、いくら楽しくても早く家に帰りたいなくなったりする。それはきっと家にある安心感、学校にも旅行にもない安心感がみんなの気持ちをほっとさせてくれるのだろう。

### 3 包まれた感覚の中での「休み」

#### 1 落ち着くためのあの手この手

「るすばん」や「夜」を怖がる子ども達を単なる「怖がり」「臆病者」として片付けてしまうわけにはいかない。実はこれらの子ども達は「家の持つ神秘性」等にもっとも敏感な子ども達なのである。意に反してむくむくと動き出すイメージ、そしてそれに伴う通常とは違う体感、そうした状態に体がなつてしまった時、それを「怖い」と称しているだけである。

先述したように、こうしたイメージの動きは人間にとって大切な意味をもっているのだが「どろぼう」「お化け」といった知識によって歪められてしまっている。

\* ある朝、わたしはお母さんとお父さんに「もう一人であるすばんできるでしょう。きょうはおそくなるの。」

(石崎小 6年女子)

以上が「おうち作文」(他に「るすばん」作文)から拾い上げた「子ども」という生命体を包み込んでいる「おうち意識」の概略である。

こわい?」  
と聞かれました。わたしは「もう三年生だもん。だいじょうにきまつてるじゃない。」

と言ってしまった。学校でもずつとしんばいだった。その日は帰りがとてもこわかった。心の中でいろいろなことを思い込んでしまった。「火事になったらどうしよう。どろぼうが入ってきたらどうしよう。」などといういろいろかんできた。ドアをあけてわたしは「ただいま。」と言った。でもだあれもない。いきなりかみなりがなり、大雨がたくさんふつて、わたしはつくえの下にもぐってしまった。(六郷小 3年女子)

\* 一人であるすばんしている時はこたつやふとんにはいり顔だけだしている。頭の中で〇〇君とデートしてる場面をおもうかべる。だが、すぐこわいイメージにまけてしまい、おばけがデートのイメージをぶちこ

わしにしてしまう。こわいイメージにいじめられて私はすこしくやしい。なんだか横を見るだけでおばけがいそう。何かガツツという物音が聞こえると、こわい人たちがおばけのことを思い出してしまふ。外が気になる。気のせいだと思っても気になる。外を見に行ったらだれもない。それでもこわくなり、ふとんを頭までかぶったが、まわりで何が起きていのか何もわからないから、目の下までふとんをさげていた。するとトイレに行きたくなった。何かこわい。トイレの後ろがまどだからなんかうしろからおばけが「ワッ!」とおどかしそうな予感だからうしろをキョロキョロとみてる。そしておわると、へやまでかけていきふとんにまたもどる。(石崎小 3年女子)

これらの例とは逆に、こうした「夜」ならではの体感を楽しんだり「神秘的な物」にたいしてワクワクする子どもも多い。そして沸き上がるイメージに引かれ思いもよらない行動をしてしまふのを楽しむのである。

\* るすばんをしたら、かがみがおどつてました。つぎに、じしんがあつて、かがみもつとおどつてました。つぎに、にわからわんわんってこえがしました。とをあけてみたらのらいぬがわんわんいつてたからみ

るくをあげました。…とでもするすばんがたのしかったです。

(石崎小 2年女子)

余計な知識による恐怖から解放され「落ち着いた」状態で自然にイメージが流れ、その世界に浸りきる事ができれば、子どもは安らぎを得たり楽しんだり出来るのである。

家の中にながら『うち』を喪失した子どもが、どのようにして「落ち着き」を取り戻し、本来の自分の世界を回復させているかを「るすばん作文」を中心に改めて概観してみたい。

★ 境界線をきちんと区切る

\* わたしは一人つきりですすばんをする時には、先ずトイレの窓のかきまですしめに行く。だつてどろぼうが入ってきたら困るからだ。それが終わったらちゃんとかきがしまつているかどうかをチェックする。「こゝもよし。よし。よし。」やとと落ち着いた。  
(六郷小 3年女子)

★ 「こたつ」や「ふとん」にもぐる戸締まりをしつかりただけでは『うち』としての落ち着きをとりもどせない子どもはしばしば「こたつ」や「ふとん」に潜り込んでしまう。

文例ではこの時に明りをつけテレビの音をさせておく子どもが多いが、わざと家の中を暗くして音もさせない状

態を作る子どももみられる。自分が子宮の中にいた頃の潜在的な記憶がそうさせているのかもしれない。

\* るすばんの時はこわいから、テレビをけして、こたつもけして、真っ暗なこたつに頭までもぐって、じーっと音を聞いている。すきまから、そとをちよぼっと見ている。  
(石崎小 3年女子)

\* 一人ですすばんをしているときこわいからこたつの中でずっとかくれています。どろぼうが入ってこないようにかぎをしめて、カーテンも閉めてまっくらにしてこたつの中にかくれています。でも、こたつの中じやひとりぼっちでこわいから、おもしろくないテレビでも見ている。夏でもこたつの中に氷をもってきてなめている。  
(石崎小 3年男子)

\* るすばんの時はこたつに入りファミコンをやる。そして、自分の回りに大事な物を置き、かべを作る。そしてラジオをかけテレビをつけておく。こたつはほくのすみかだ。  
(石崎小 4年男子)

\* もう、こわくてこわくてたまんない。家のかぎをしめまくって、こたつの中にはいる。天井をねずみが走ると、こわくてちびちびちやう。それで、

観ないけど、テレビをつけておく。

くらくなるともうこわい。だれかがいそうな感じがしてこわいんだ。ぼくの横には、はえたたきを用意しておいてもこわいものはこわい。がまんしてこたつの中に入っている。それでも、天井にねずみが走るのやっぱこわい。  
(石崎小 4年男子)

★ 別の事に夢中になる

文字通り別の「夢の中」に浸りきること余計な方向に伸びようとするイメージの世界から逃れようとしている。

\* スーパーファミコンをしていると、むちゅうになつてるすばんのことをわすれてしまう。  
(石崎小 3年男子)

\* 一人ですすばんしていても、ゆめの世界に入った時はとっても楽しいよ。テレビのマンガを思い出す。イメージがはたらくんだよ。いっぱい！  
(石崎小 3年女子)

\* るすばんの時、ぼくはライトをもつていぎ、出発。べんじよに入り、ポットンべんじよのあなをのぞいてたんけんだ。あなの中にライトをてらしうんこを見る。うんこの形を調べたりしている。しかし調べるには、道具がいる。せんたくばさみ、ライト、この二種類である。せんたくば

さみは鼻にやり、ライトはうんこをてらす。トイレットペーパーもポットンべんじよ中にある。うじ虫や変な形をした虫がうんこの上にぞろぞろのつかっている。そのうちぼくはうんこがしたくなつた。しかし、ぼくはがまんしてかんさつをつづけた。  
(石崎小 3年男子)

\* 夜、兄とるすばんした時、こわくてこわくてたまらなかつたので、プロレスをしました。るすばんのゆうれいがわたしにみかたしてくれました。はじめこわくて心がガンとしていたのに、心が明るくなつてきてランランとなりました。  
(六郷小 4年女子)

\* 時々、テレビをかけると、たまたまエツチなテレビがかかっている。目がじゅうけつしているすばんなんかこわくなつてくるヨ。  
はえが一匹だけ飛んでいて「うるさいな。」と思う時がある。はえをたたくだけで何か、るすばんなんかしてないように感じてくる！  
(石崎小 4年女子)

\* 夢中になつた時は、るすばんなんて忘れちゃうけど、思い出すと後ろからどろぼうやお化けがこっちに来



るような気がしてとつてもこわい。  
お母さんが帰ってくる飛び付いて  
よろこぶ。(六郷小 3年女子)

\* 夜に一人であるすばんしている時は  
テレビと電気をつけています。空耳  
でコトンと音がしたら、オモチャの  
かたなを持ってこたつにもぐってす  
きまを少しあけてのぞきこんでいま

す。だれもいなくなったらほっとして  
またテレビをつけます。時には、こ  
たつの中でとうみんごっこをしてゆ  
めの中にはいっています。それから、  
すきなきょうりゅうの本を読んでこ  
わいことをわすれてしまいます。お  
母さんが帰ってくる、あー、助か  
ったと思つて体の力がいっしゅんの  
うちにきえます。帰つて来た時こた  
つの中でねてしまったこともありま  
す。(石崎小 3年男子)

### ★ 眠る

他のことを考えても夢中になれず、  
恐怖を忘れない場合、眠つてしま  
う子どもも多い。

次の子どもは、まわりの子どもが  
すばんしている時に、人形や鏡や風の  
音が怖い、などと口に出しているのを聞  
いて「ぼくは平気だよ！」と自慢しな  
がらこう書いた。

\* ぼくはにんぎょうであそんでいま  
す。たとえビュビュウかせがふい

ていてもへっちゃらです。大きなか  
がみがあつてもへいきです。ねてれ  
ばへっちゃらです。  
(石崎小 2年男子)

眠るとは、ただの現実逃避ではない。  
そこには「いい夢との出会い」への期  
待がある。

\* るすばんと言われたら、思わずね  
むくなる。とびらを全部しめてこた  
つに入った。ねても体がブルブルつ  
てなつて、とりはだがたつた。さむ  
かった。いいゆめをみなかったので  
ビデオを見た。  
(石崎小 3年男子)

### ★ 人形を抱く

\* 一人であるすばんしても、雨がふ  
つてればべつにこわくはない。雨の  
ザーという音がこわいシーンとし  
た所をなくしてくれる神様のような  
ものだ。雨がふつてればるすばんし  
てもいろいろなことができる。も  
ちろん、となりにぬいぐるみはおく  
けどね。  
(石崎小 3年女子)

\* るすばんはとつてもこわい。へん  
な声が出ているような気がした。こ  
わいからいつも人形をだいている。  
トイレに行く時はそりそりとして足  
音をたてずに行く。流す時はジャー  
と音がするとこわいので流れた時は

ちようスピードでへやにもどる。

(六郷小 3年女子)

\* 今ではんきをつけてへやの中にい  
ればなれちゃったけど、ようちえん  
のころはお母さんが五時までに帰つ  
てこないとうエーンと泣いてしまう。  
まどの所を見てお母さんと思つてい  
る。まどになみだをこすりつけてワ  
ーワー泣く。六時になってお兄ちゃ  
んが帰ってきてママって泣いて泣  
へやのすみっこで人形をかかえて泣  
くの。その人形はいまでもボロボロ  
だけどあるの。(六郷小 3年女子)

人形は単に家族の代わり、というだ  
けで抱いているのではないと考える。  
人形にしみついている「におい」も大  
切な意味を持つ。  
「におい」について次に考えてみたい。

## 2 「におい」と 「落ち着き」

ここからは「おうち作文」と共に  
「忘れられないにおい」という題で書  
いてもらった作文も用いて、子ども達  
が「うち」の世界で心から「落ち着き」  
「休む」ことについて、さらに深く考  
えていきたい。

### 「眠れない子ども達」

— においの違いからくる混乱 —

イメージの流れに敏感な子ども程、  
「帰ってから・いつも」や「意識の残  
像」などでみてきたような、繰り返さ  
れる習慣やイメージの連続にこだわり  
を持つ。

そのため、例えば「まくら」などが  
変わるだけで、眠りにつく際の寝心地  
のイメージとのずれが生じ、眠れなく  
なってしまう。子どもが記述する中で  
最も多いのが「においの違い」による  
戸惑いである。

\* おんせんに行つて、ホテルにとま  
った。ねむる時がきた。においがな  
れてるふとんとちがう。まくらがや  
わらかいのは、きもちよいがねられ  
ない。

おきた時、さいしようちだと思つ  
ていて目をあけた時にホテルだった  
のでびつくりした。そしてもう一回  
ねるぞと思つてもねられなかった。  
うちのほうが気もちよくねれる。う  
ちは人をまもっているのか。

うちにかえるとにおいはべつにし  
ない。だけどホテルに行くとなん  
タオルみたいなにおいがする。うち  
だけにおいがしないのはにおいがな  
れるからなのかな。ほかのうちに  
いってもにおいがする。

つらかった。やせがまんした。か  
ぞくでホテルに行つて、あんまりた  
のしくなかつたやっぱりうちがいい  
んだな。  
(石崎小 3年男子)

この子どもの場合、一度目が覚めた後の記述も興味深い。イメージの時間軸が眠りの時の軸と違ってしまったことがはっきりと読み取れる。

また、この子どもは「まくらがやわらかいのは、きもちよいが」と記述しているが、それでもにおいが違うと眠れないのである。

## 「においの固有性」 ——「うち」なるにおい——

先にみた「落ち着き」を取り戻そうとしている子ども達の様子には、「こたつ」や「ふとん」に潜り込む例が多数あった。いうまでもなく「こたつ」には家族の足の匂いなどの体臭がこもっている。そしてまた、その中は「温かく」「暗く閉ざされた袋状の世界」である。「ふとん」にも自分の体臭が（慣れている故に気がつかない場合もあるが）しみ付き、すっぽりと潜り込むことで「こたつ」と同様の世界となる。

ただ自分の体を包み込んでくれれば何でもよいわけではないことがここからわかる。「自分のうちと実感できる世界」さらには時空を越えて「母の胎内に包まれていた世界」に向けてトランスフォーメーションを起こしてくれ「におい」が必要なのである。

先の子どももおぼろげに意識しているが、「家」によってそれぞれ固有のにおいを持っている。そしてまた家族そ

れぞれも固有のにおいを持っている。この違いが重要である。

\* うちには、きたないうんちをする牛がいます。ぼくたちが三時のおやつを食べる時だっておならをプブプブーとします。

しかもぼくが外で何かを食べる時だつてこつちにおしりを向けてポトポトポトつとうんちをするのです。うちではニワトリもかっているのでもそれもおんぶんちにおいいます。

（上石崎分校 3年男子）

\* ぼくのおうちでは、テレビを見る時一回はおならをします。とくにおじいちゃんや五れんばつぐらいします。くさくてくさくてたまらないです。そのときはいつもおじいちゃんはおほくの頭をなでます。

おとうさんのおならは、小さいおならではなく大きなおならをします。においはしません。

お兄ちゃんのおならは、小さいおならで、手をおしりにつけてからぼくの顔に手をひろげます。ぼくはくさくてたおれそうです。

（上石崎分校 3年男子）

\* ずっと前、ひいおじいちゃんが生きていた時、ひいおじいちゃんのおいがありました。少し、いいにおいでした。ひいおじいちゃんと、うち

のお母さんのおいは、どこかがちがいます。お母さんのおいは、少し、お花っぽいにおいがします。それから、ひいおじいちゃんのおいは、ちよつとだけうちのおばあちゃんのおいいます。

（石崎小 3年女子）

\* わたしは死んだひいばあちゃんのおいを知っています。ひいばあちゃんのおさいふは、ひいばあちゃんらしいにおい。わたしはお母さんに「それは、ふるいからもうすてなさい。」と言われたけどすてなかった。さいしょ、すてようと思つたんだけどすてられなかった。においがして、ずーつとかいいました。

（石崎小 3年女子）

\* わたしはお母さんのおいがすきー！お母さんのおいをおかぐと、心がおちついてきたり心がゆつたりしてくる。時々、お母さんが死んだまねをする。わたしがなくとおきる。わたしはお母さんのむねにとびついてなく。そしてにおいをおかぐ。

（石崎小 3年女子）

\* それぞれ家のおいがする。くさいにおい、きたないにおい。友達の家に行くと、自分の家のおいと違う。何でかな？先生の家のにおいはどういうにおいかな？

きつと先生のにおいがしてあつちこつちにいるいろんなものがちかつかるか？先生の家のにおいをおいみたいかなー。

（石崎小 4年女子）

\* ぼくの忘れられないにおいは家族のにおい。お父さんのにおいは家族の事を支えながら全国をまわっている責任感が感じられるにおいだと思ひます。お母さんは「がんばつて仕事しています。」というような力強いにおいだと思ひます。お姉さんは優しいような心が温まるようなにおいだと思ひます。そしておじいさんは、ちよつと畑くさいにおい。小さいころはあまりいいにおいとは思ひていませんでした。でも今思うと、本当の忘れられないにおいとはこのにおいなのかもしれません。

（学習院初等科 5年男子）

それぞれ固有の「におい」があるからこそ「うち」なる「自分の世界」という実感がわくのである。だから、その子どもにとって愛着のあるにおいがあるれば、何も「ふとん」や「こたつ」である必要もない。「人形」「タオル」などでもよいのである。

## 「におい」

——思いでに包まれる安らぎ——

思いである「におい」と出会った時、子どもは理性のブレーキがかから

ない分、一瞬にして時空を飛び越え、その時の世界に入り込んでしまう。そこでは、ただ知的に出来事を思い出すのではない。トランスフォーメーションを起こし、イメージそのものが動き出すために、はつきりとした実感を伴うのである。それが「なつかしき」

「心地よさ」のある思い出であればあるほど「温かな思い出に包み込まれたような安らぎ」を覚えるのである。

\* わたしはひっこしました。ですから前の家に遊びに行ったら、今の家のおいとちがいます。前の家は風のおいがあるのです。でも、今の家にはなぜか風のおいがながれてきません。前の家に行くとわたしは、きのう行つたばかりでも同じにおいをかぐと「なつかしー」といいます。そして、おふろに入った時、出まどを開けると風が入ってきます。そしてわたしは「なつかしー」と思います。それはいつも感じます。このにおいは、わたしがすごくすくなくなつかしいにおいだからです。

(石崎小 3年女子)

\* あの時のにおいが今でものこっています。それは死んだおじいちゃんのおいなんです。そのにおいは、お金とか、おじいちゃんが使ってたもふに、においがたくさん残っています。そのにおいがかぐと、じいちゃん

が目の前にいるようになってしまっています。

(石崎小 3年男子)

\* わたしが五さいのころ、ひいおばあさんにかつてもらったくまのぬいぐるみに今でもにおいがします。それはひいおばあさんのおいなんです。ひいおばあさんは死んでしまいましたが、そのくまのぬいぐるみのおいはひいおばあさんのおいなので、そのにおいがかぐとひいおばあさんのことを思い出します。思い出すだけで、ひいおばあさんが生きているような気がします。だからねる時は、くまのぬいぐるみをはなしません。

(石崎小 3年女子)

\* 私は小さいころ、ガーゼを持ってねむっていました。右手の親指を口に入れて、同じ右手でガーゼを鼻にあててねむります。ガーゼのふわふわと、そのにおいが気に入っていました。どんなに泣いてもガーゼを渡すとすぐにこの形でねてしまったそうです。私のガーゼのおいは、お花のいい香りよりも、大好きなお母さんのおいよりももっといいにおいなんです。今も時々、私の引き出しのガーゼのにおいがかぐと、あのなつかしい大好きなおいになります。そうすると赤ちゃんになってしまいます。(学習院初等科 5年女子)

### 「消臭による落ち着きの喪失」 —「においを罪悪視する現代社会」—

以上の様に、心を落ち着かせ、安らぎを得るために『におい』が果たす役割は大きい。

ところが今日ではTVのコマーシャルを始めとして「におい」のあることが罪悪であるかのような宣伝が盛んになされている。子ども達をはじめとして若者たちは、懸命になって自分や部屋などの生理的なにおいを消し、人工的なにおいをまきちらしている。

それだけではない。清潔にしていたとしても固有に持っている体からのにおいに悩んでしまい人前に出られなくなったり、それがいじめられてしまう原因にまでなったりしてしまっている。さらには、他人の匂いや汗などに対する嫌悪感までおとりたて、ついには「抗菌グッズ」が人気商品となる世の中である。このような宣伝をしていけば、いじめで「バイキン」などと言われ仲間外れにすることが行われていても不思議ではない。

これでは、ますます子ども達は落ち着く場所を失ってしまふ。

『人工的なにおい』と『落ち着き』に関して書いてある文例があるので紹介しておく。

\* 私の忘れられないにおいとは参観日の時のにおいです。そのにおいの

正体はお母様方の香水です。いろいろな香水をつけているので鼻が変になってしまふそうです。緊張するよう香水のにおいで集中できなくなってしまう事が困ります。家で母は、あまりにおいのきつくない香水をつけているので気になりません。大人になったらお母様の様な香水をつけようと思いました。

(学習院初等科 5年女子)

\* わたしにとって忘れられないにおい、それはお母様のおいなんです。一人っ子で甘えん坊の私は、よくだっこしてもらいました。お母様の肩に鼻をすりつけると、香水やお化粧のにおいでもない、いいにおいがあります。きっと私だけが知っている秘密のにおいなのかもしれません。この間もお母様のセーターをさわりながらソファでいねむりをしてしまいました。お母様のおいがあると私は何となく安心するのです。お母様はすてきなにおいなのに、お出かけ前にはスプレーなどするのが不思議です。

(学習院初等科 5年女子)

これまで作文を通して子ども達の「おうち意識」を探ってきた。そこに表れていたのは様々な形で「心が落ち着く場所を求めている子ども達の姿」であった。

しかし、「うち」に帰ってきてても、まるで「そこ」の世界にいるような忙しい「時間の流れ」や、ありのままの姿を出せない「人間関係」が現代の家にはあまりにも多い。親子の話題も現実対応の事ばかりで、学校と同じ様に問題解決を要求されてしまう。

そのため、子ども達は休む場所を失い、次の生活に備える事が出来なくなっている。自分にとって本当に大切なことが何なのかを振り返るゆとりも失っている。結局は個性と自分勝手手の区別もわからない。また、優しさに包まれている実感が少ないから、他人へ思いやりの気持ちを向ける心のゆとりもない。

落ち着く場所のある子どもは、強制されなくても家や家族を大切にしようとする心を持って成長していく。時には厳しい親の態度も「愛情に包まれている」と受け止めていく。

\* 家族がいい。帰って来た時、だれかがわかってくれないとなんかむなししい。食事だって一人で何も言わず

にテレビをみながらたべたつままらない。家族がいて嫌な事もあるけどいいことが多い。  
(六郷小 6年男子)

こうした状況に置かれた子どもが今日では普通になっている。しかしここでは、かつての様に「母親は家庭にいるべきだ。」と主張したのではない。理想通りにいかぬ現代の生活様式の中で、どのようにして「落ち着く場所」を確保するかを考えたいのである。

そこで鍵を握るのがトランスフォーメーションである。それによって「うち」の世界に包み込まれたと感じた時現実の生活様式が理想の形ではなくても子どもは落ち着き、その中で素直な自分と出会い、心からの安らぎを得る事が出来る。このように包み込んでくれる世界を、かねてより日本人が用いていた言葉に習い「おふくろの世界」と呼びたい。

家だけではなく学校や地域でも心の居場所作りが叫ばれているが、『おふくろの世界』での時間・空間のイメージとそれらのイメージとが重なりあうかが重要であるといえる。

その世界に子どもが入り込む媒介の用意こそ大人の責任であり、その中に「におい」もしつかりと位置付けた

のである。

本会の主宰である上原輝男先生が亡くなる数日前、この論文をまとめる上での話し合いの席で最後にこう話された。

「家は母胎であり休む場所なんだよ。「やすむ」とは「いやすむ」であり(注、ヤ行音は生命力を表す音として捉えている。)'いのち'が「澄む」、つまり生命がより純粹に清らかになっっていくのが家なんです。」

家や家族や思い出を大切にしている多くの子ども達の作文がこのことを裏づけている。

(茨城県茨城町立石崎小学校教諭)

☆調査期間 昭和六二年～平成八年

☆調査協力校(調査期間中の合計人数)

1年生 東京 西永小山 二三名

茨城 六郷小 六〇名

2年生 横浜 東俣野小 四八名

茨城 六郷小 六四名

石崎小 二五名

上石崎分校 九名

3年生 茨城 六郷小 一七名

石崎小 四五名

4年生 東京 上石崎分校 一二名

玉川学園 一〇名

八王子第六小 三五名

横浜 名瀬小 三二名

茨城 六郷小 一〇九名

石崎小 二五名

5年生 東京 学習院初等科 八〇名

6年生

茨城 六郷小

五四名

茨城 六郷小

二五名

石崎小

二三名

